

31. 桑津だんじり

桑津のだんじりの起源は、文政年間（1818年～1930年）で、保存会も同時期に結成され、現在「桑津天神社地車保存会」として継承されています。

毎年、7月16日・17日のお祭りには、町のあちこちの角でハッピー姿の子ども達がたっています。だんじりが通ると綱引きの中に加わります。

昔は電灯がないため提灯には油（灯明油）が使われていたそうです。電灯が使われだしたのは大正2年（1913年）ごろで、今ではだんじりにバッテリーが積まれています。

桑津だんじりのまわる地域は19町会あり、だんじり曳行は大変です。

しかし、地元の長老、青年団とも、貴重な町の文化財である「だんじり」と「だんじり囃子」を大切にし、さらに盛んにしていこうと考えています。



地元の桑津小学校では、だんじりの「写生会」を行ったり、「地域学習」や「体験学習」として地車保存会の人たちから桑津だんじり囃子（ばやし）の手ほどきをうけたりしています。

「桑津天神社地車の由緒」の碑

32. 桑津遺跡

桑津小学校正門脇には、「桑津遺跡」の石碑があります。平成4年（1992年）3月、大阪市顕彰史跡として建立されたものです。

桑津遺跡は東住吉区桑津・駒川・西今川・北田辺一帯に所在する縄文時代前期から中世にいたる複合遺跡で、立地するのは、上町台地東斜面の標高3~6mのところす。

遺跡の発見は昭和4年（1929年）、工事現場から土器や石器が出たことが発端で、発掘調査がはじまりました。

昭和12年（1937年）・昭和58年（1983年）・平成になってからの工事でも、桑津小学校校庭、東住吉中学校校庭、旧国鉄官舎跡その他からいろいろなものが出土しました。

また平成3年（1991年）、廃井戸の底からわが国最古の「呪符木簡」が発見され、大きなニュースになりました。

・縄文時代以前

旧石器時代から縄文時代への過渡期に出現する有舌尖頭が、東住吉中学校校内調査から出土しました。また、縄文時代前期頃の石鏃が桑津4丁目出土しています。このことから、桑津遺跡に人が住み始めたのは約1万年以前にさかのぼると考えられています。

・弥生時代

弥生時代の遺構は、桑津3丁目から5丁目にかけての広範囲で検出されています。居住にかかわる柱穴・土壇・溝・井戸や、埋葬にかかわる方形周溝墓など、居住地と墓地というムラのようなようすがわかります。

出土道具には農具（石包丁）、工具（蛤刃石斧・抉入片刃石斧）、漁具（蛸壺・石錘）、武器および狩猟具（石鏃・石槍）紡織具（紡錘車）などがあります。

・古墳時代

5世紀後半の須恵器・土師器が広範囲で出土しています。

・飛鳥時代以降

奈良時代後期の大規模な堀立柱建物が、桑津4丁目から検出しました。

平安時代以降から中世にかけては、緑釉陶器や輸入陶磁器の出土遺物から、居住地となっていたことが推測されます。

桑津遺跡に関しては、宝暦12年（1762年）の桑津村の地籍図に「大塚」、「赤塚」、「罐子（かんす）塚」など古墳らしき字名がみえます。

「大塚」については近年の町名変更前まで美章園近くが大塚町と呼ばれており、古墳があったことを今に伝える町名のひとつであったといえます。



（桑津小学校前、桑津遺跡の碑）

33. 桑津環濠(かんごう)集落

中世の摂河泉一帯には、塚、平野をはじめとして、多くの環濠集落が成立していました。

環濠集落建設の目的は一般的に、(1) 軍事的警察的自衛 (2) 保水灌漑 (3) 洪水対策 の三つであるといわれています。

桑津の場合、(1) の軍事的警察的自衛手段として四周を水濠に囲まれ、竹藪で一部囲まれていました。(古老の話)。外周の濠の東南部に2カ所、金蓮寺東側に2カ所、それぞれ少しづつ離れて濠が広がって池となっていました。

外部に通じる道路としては北に2カ所、南に1カ所、西に1カ所の計4カ所だけで、現在でもその地名として桑津北口・桑津南口などが残っています。

これら入口には木戸が設けられ、夜間は閉ざされていました。

慶応四年(1868年)の鳥羽伏見の戦いの頃、落武者が夜にやってきて、「おたのみ申す おたのみ申す」と木戸を叩いて救いを求めたが、村人は後難を恐れ灯を消して木戸を開けることは無かったそうです。集落内の道路は、北口より南口へ見通しの出来ない程度の、ゆるいカーブのある直線道路が一本あるだけで、他は複雑な屈曲をみせています。

南北に通じる道路として、もう一本京善寺東側道路がありますが、最短で30米先がみえない屈曲、見通しの出来ない四辻が2カ所、三辻が2カ所あり、その他の道には袋小路、クランク形の曲り、L字形でカーブになっているなど、初めて来た者には分かりにくくなっています。

軍事的自衛手段としてもう一つ、環濠の南側に突出部があります。南口からの侵入者に対して横矢をかける目的でつくられたと思われます。

(2) の保水灌漑として集落内の排水溝と考えられる箇所として、西側の南北に通じる道路は現在も低くなっています。南北からの水が合流し東に流れ、一旦池に入ってから環濠に入り込んでいたようです。

(3) の洪水対策としては環濠集落東側に駒川・今川が流れ北上して平野川に入っていますが、桑津環濠集落は上町台地の東縁の緩傾斜地で外側とはっきりした段差が認められており、集落東側の川が氾濫しても集落内が浸水しにくくなっていました。

桑津環濠集落は昭和はじめ頃まで、およそ400年間続いていました。

今では、濠はうめられて道路に変わりましたが、細くて曲がりくねった道や、木戸口にまつられていた地蔵尊は今も残され、往時を偲ばせています



34. 桑津ハートフレンド

「子ども達が、地域の中で安心してのびのび遊べる場所がほしい」これはすべての親の願いです。

平成13年（2001年）、桑津小学校の北側に、仮設消防署が建ちました。

地区の消防署が建て替えられることになったからです。

1年後、跡の建物を「子ども達のために使わせてほしい」という桑津連合振興町会の申し入れに、大阪市の協力を得て平成15年（2003年）6月に開所しました。

「桑津こどもの家 ハートフレンド」と名付けました。

「子どもたちの心地よい居場所になり、子どもたちにさまざまな経験をしてほしい」という願いがかない、15名の母親が集まり活動を始めました。運営はボランティアが中心となり、図書室の書籍の寄贈など、備品はほとんど地域の方々から寄付されたものです。

「親として子ども達にどのようにすごしてほしいか、どうしたら楽しい子育てができるか、どうしたら私たち親も幸せか、そして、私たちの地域を思う気持ちをどうすればもっと育てられるか」ということを考える中で生まれた15の活動を行いながら、子どもの居場所づくりに取り組んでいます。

仮設消防署跡の活用が終了し、平成25年（2013年）4月に新しい場所に移り、その後、平成28年（2016年）10月より、現在の場所（桑津5-13-48）に移って活動を展開しています。



35. 桑津墓地

榎神社（No. 16）境内にある桑津墓地には、行基菩薩の開基との伝承があります。ただ、行基年譜をみると、行基自身がこの地で布教活動をした事実を検証できませんので、その弟子達が行基の名を借りて布教活動をしたものではないかと思われます。（行基由来の伝承については、事実が検証できておらず、異なる伝承もあります。）北田辺村と桑津村の葬祭や斎場として存続し、現在 600 基ほどの墓碑があり、桑津墓地維持会が整備管理をしています。なお、この場所の字名が大塚であり、地形も小高くなっているため古墳があったと言われています。古来から古墳の周辺には墓地が造られますので、うなずける伝承地です。墓地の北東部・榎神社神殿西側辺りが昭和 7 年（1932 年）まで使われていた大斎場の跡地であり、棺を安置し、住職が引導法要をした「蓮花台（ウテナ）」石がその傍らに保存されています。墓域の南西角にある「天王寺地区区画整理記念碑」（No. 52）は、昭和 3 年（1928 年）2 月にこの辺りを区画整理した記念に昭和 6 年（1931 年）2 月に建立されました。



榎神社正面
奥に桑津墓地の入り口があります



36. 国道25号(通称奈良街道)



国道26号 杭全交差点 右・八尾 左・今里方面



国道26号 杭全交差点 中央・寺田町 右・今里方面

【上写真】

杭全交差点を北西側から撮影
右 八尾・左 今里方面

【下写真】

杭全交差点を南東側から撮影
中央 寺田町・右 今里方面

東住吉区の北部を、東西に走る国道で昔は、通称「奈良街道」と呼んでいました。(大阪・京都と奈良を結ぶ奈良街道と呼ばれている道は、ほかにもあります。)

- ・ 起点：(三重県四日市市) — 奈良 — 柏原 — 平野区 — 東住吉区 — 阿倍野区 — 天王寺区 — 浪速区
- 終点は大阪市北区の梅田新道交差点 (終点は大阪市中心部と記述されている場合が多い)、
- ・ 全長：144.5km

天理以東では西名阪と重複しているところがあります。奈良県内で国道24号線と交差しています。

梅田新道(北区) — 浪速区までは国道16号線・165号線と重複、梅田新道(北区) — 東住吉区 — 柏原市までは国道165号線と重複しています。

- ・ 東住吉区内では、国道25号線は杭全交差点で、今里筋と交差して居り美章園方面への道路とも交差して五叉路となっていて、近くに横断歩道が無いので、5角形の歩道橋が設けられています。



昭和38年(1963年) 関西本線杭全町踏切

37. 駒川



大和川付替反対陳情書に引用された「大和川開鑿地方図」によれば、駒川は狭山池の水を一時滞留させる轟池(堺市北野田)を源流とし、西除川に併行して北進する川と依羅池(※)を源流とする川が合流した水路で、古くは高麗川(巨摩川)と呼ばれていたことから、沿岸に百済や新羅からの渡来人が住み着いたことに由来すると言われています。現在の人工水源の近くに、鷹合神社があり、ここには日本書紀の応神天皇43年9月条があり、百済系渡来人の酒君に依羅屯倉阿弭子(ヨサミノミヤケアビコ)が献上した鷹の飼育を命じた伝承があるので、沿岸地域に「鷹合わせ=鷹狩」が得意な百済系渡来人が定着していたことが想定できます。

また、架ける橋の名前も「百済大橋」「酒君塚橋」「鷹匠橋」「鷹合橋」があり、この伝承に因んだものと考えられます。

水源の天野川や依羅池が大和川付替の際に分断され、雨水の溜池となった依羅池の水によって細々と流れていた駒川は、昭和50年(1975年)頃の埋立てにより水源を失い、現在は今川と同様に大阪市平野下水処理場での砂濾過された高度処理水を受けて、人工的にその流れが維持されています。

一級河川ですが、大阪市の工営所が管理を委託されているのは、今川と同様です。

※依羅池

現在の住吉区庭井1にある大依羅神社(オオヨサミジンジャ)南側の狭山池に匹敵する広い池がありました。

狭山池と同様に、天野川を源流とし、大変浅い遊水池(1-2m位)で、保有水量は狭山池より遙かに劣りますが、駒川の他に、長池や桃ヶ池を結ぶ長池筋(猫間川)や、西に向かう細江川の源流となっています。日本書紀の崇神天皇の62年10月条や、古事記(崇神記)にはその建造の記録があり、3世紀中頃の成立と思われますが、考古学的には5世紀中頃(允恭や安康天皇の頃)で、狭山池よりも150年早く開削された(「依羅池付近の微地形と古代における池溝の開削」日下雅義)と考えられています。

宝永2年(1705年)の大和川開削により、当時10万坪もあり、昭和大改修時の狭山池の面積に匹敵する大池の南2/3が川底や河川敷となり、北側の1/3の32,700坪が残されましたが、川が低い位置にあったので、水を引くことができず、雨水の溜め池となって、本来の水田用水池としての機能を次第に失っていきました。

昭和50年(1975年)頃に最後に残っていた仁右衛門池も区民や阪南高校の運動場として埋め立てられ、依羅池は完全にその姿を失いました。

38. 駒川商店街

(1) 第2次世界大戦前の昭和10年代（1935年～1944年）

大阪市の市街地拡大政策に伴って住宅が建ちはじめ、商店もぼつぼつ出はじめました。また昭和18年（1943年）4月には住吉区から分離し、東住吉区となりました。

(2) 太平洋戦争とその直後の昭和20年代（1945年～1954年）

大阪大空襲を免れた東住吉区に、市内の被災者が流入し、人口が急増しました。商店会も発展し、中野市場（昭和5年（1930年）設立）の発展に伴い鷹合商店会も設立され、戦後の発展期を迎えました。

敗戦直後は闇市も加わり、不穏な勢力争いが発生したが、物資が豊富に出回ってくると、闇市は姿を消し、健全な市場となり、駒川銀座商店会と駒川中商店会（昭和28年（1953年）4月）、針中野駅前商店会（昭和28年（1953年）5月）、センター駒川商店会（昭和28年（1953年）8月）、日之出商店会（昭和29年（1954年）5月）、駒川南商店会（昭和29年（1954年）10月）などが相次いで設立されました。

(3) 昭和30年代（1955年～1964年）のスーパーマーケット進出期と駒川商店連合会の設立

人口増加と近鉄針中野駅周辺を中心に商店数が増加しました。また、市場の揺籃期には商店街の協力により、大型店（サカエ、銀ビル、ニチイ、イズミヤ、万代百貨店等）が続々と進出し、区外からの多数の買物客が針中野駅を乗降しました。当時は商店と大型店との関係はコバンサメの状態、共存共栄が達成された。

昭和32年（1957年）6月には、北は南海平野線駒川駅から南は鷹合市場まで総延長1km余り、11の商店会を結ぶ「駒川商店連合会と駒川駅前商店街振興組合」が設立されました。晴雨や四季の気象変化にも関わらず、常に購買客で満ちあふれる商店街を実現すべく、商店街を一貫する空調や放送施設完備のアーケードの建設が企画されました。

（画像説明）昭和38年（1963年）の駒川商店街



（次ページへ続く）

東住吉100物語

(4)昭和40年(1965年)以降、今日に至る商店街の盛衰

近鉄南大阪線と南海平野線沿線の買物客が加わって、東住吉区全域に限らず、南大阪一円の購買力を集約し、大阪では千林、服部、中野の3大市場に代表される大発展を見て、昭和40年(1965年)6月には駒川商店街振興組合が設立されました。

しかし、近鉄沿線の大阪郊外にも衛星都市が発展し、各地で郊外型の超大型スーパーが続々と建設されるに至って、沿線の買物客は減少し始め、商店街の力も次第に弱ってきました。このような大型店の郊外化が進むと、ダイエー、サティー、いずみや等の既存のスーパーも相次いで撤退し、商店会員との共存共栄の関係がなくなり、時代の流れを痛感するところでもあります。

地域密着型の商店街として、その活性化を回復する努力を続けているところではありますが、商店経営後継者(若者)の商店街離れによる高齢化と共に、購買層にも高齢化が進み課題も多く、「若者に満ちあふれる市場形成を目指して、その対策を模索中である」と云うことが、駒川商店街(小売り業界)の現状であります。



現在の駒川商店街



39. 五輪橋橋詰めの塚

桑津3丁目付近の駒川にかかる橋には、「五輪橋」と命名されています。橋の名前にもなっているこの五輪塔は大阪夏の陣の際元和2年(1616年)、平野と共に奈良街道に沿った桑津も激しい戦場になり、ここで亡くなった二人の武将を供養したものです。江戸城留守居役として動けなかった賤ヶ岳の七本槍で有名な福島正則(※)に替わって、侍大将の柴田権十郎正俊が豊臣方に付き、徳川方に味方した蜂須賀九郎右衛門とこの地で闘い、九郎右衛門の首を討ち取るが、自らも重傷を負いこの地で自刃しました。住民が二人の供養をし、二つの五輪塔を建立しましたが、一基(九郎右衛門の墓)は行方不明となっています。



※ 福島政則(永禄4年～寛永元年(1561年～1624年))
母が秀吉の叔母に当たる関係で幼い時から秀吉に仕え、山崎の合戦(明智光秀)や賤ヶ岳の合戦(柴田勝家)で突出した武功を示す。文禄の役(韓国)では、文官の石田三成と対立し、秀吉の死後に加藤清正と共に、三成を襲撃し、徳川家康に取りなされます。これが縁で、清正も正則も家康に付き、関ヶ原の合戦(清正は既に死去)では武功により、安藝(広島県)国(50万石)を与えられます。しかし、豊臣秀頼に対する忠誠心が厚く、後に二代將軍秀忠により、些細なことを口実にして、息子・正利は3千石の旗本に移されます。大坂夏の陣では、家康が正則の大坂方への寝返りを警戒し、江戸城留守居役として、正則の行動を封じ込めたので、柴田権十郎が身代わりとなって、秀頼に味方したと言われています